宮城県文化財調査報告書第十一集

宇ノ崎古墳緊急発掘調査報告書

宮城県教育委員会

はじめに

国鉄丸森線建設に伴い、その東第三工区において、遺跡の一部の破壊がさけられなくなりましたので、その記録を残すため日本鉄道建設公団の委嘱をうけ、当委員会が主体となり県文化財専門委員伊東信雄氏、大内中学校教諭志間泰治氏の担当のもとに、緊急発掘調査を行ないました。

この調査報告書は、その発掘調査を行つた結果の概要を刊行するものであります。

昭和四十一年三月

宮城県教育委員会教育長　二瓶　保

目　次

一、位　　置・・・

宇ノ崎古墳緊急発掘調査概報

一、遺　跡　名　　角田市横倉宇宇ノ崎所在　古墳　三基

二、調　査　期　日　　自　昭和四十年三月二十五日
　　至　昭和四十年三月二十九日

三、調　査　者　　宮　城　県　教　育　委　員　会

四、調査担当者　　宮城県文化財専門委員　伊東信雄（東北大学教授　日本考古学協会員）
　　日本考古学協会員　志間泰治（大内中学校教諭）

五、調　査　概　要　　次　項　より

一、位　置

宇ノ崎古墳位置図（○印）

国土地理院「角田」

1．寺前遺跡　　**2**．田町裏遺跡

3．住社遺跡　　**4**．大坊遺跡

5．宮地古墳　　**6**．吉ノ内古墳

7．長泉寺裏林古墳

二、まえがき

国鉄丸森線の路線は、一度、明治一四年、東北本線の敷設の折にここを通過するように計画されたが、当地方は養蚕地帯であるため汽車のはく媒煙などが養蚕に害があることと、汽車の火の粉から火災を起しやすいことなどを理由に、通過するのを拒む強い反対運動があつたので、止むを得ず福島より越河の険を越えて白石に至る現在線に敷設されることになつたため、この線の通過は見送られたという経歴をもつ路線である。

ところが、戦後、伊具地方の開発のため鉄道建設の急務を叫ぶ声が高まり、国鉄も輸送力の増強からみて千分の二五の勾配の福島・宮城県境の急坂を通るよりも、千分の八という緩勾配の丸森線の利点の大きいことなどが考慮され、昭和二八年には建設予定線に編入され、ついで昭和三六年には着工線に決定した。

そこで、宮城県教育委員会は、この丸森線建設に伴つて各地に埋蔵されている貴重な遺跡が破壊されることをおそれて遺跡の分布図を国鉄盛岡工事局に提出し、これらの地区をできるだけさけて通過するようにしてほしい。また遺跡が破壊されるような場合には調査してのち鉄道を敷設して貰うようにと交渉しておつた。

その間に、鉄道敷設工事主体者が、日本鉄道建設公団に移管になつたため、交渉は一時中絶したが、昭和三九年三月、公団の発足と同時に工事に対する予算もつき、路線も一応確定し、用地の買収が始まつた。丸森町山田地内に設けられた日本鉄道建設公団盛岡支社丸森鉄道建設所が全線(福島市――宮城城県柴田町槻木間)の工事の指揮をとることになつた。

そこで、さらに一層具体化してきたので、決定路線地帯の計画書を見せて貰つたところ、この沿線には角田市鱸沼の縄文・彌生の遺物包含地、埴輪をもつ古墳を含む八基の円墳群地帯、同市長泉寺裏林古墳群地帯(長軸

七五メートルの前方後円墳を中心に数基の円墳がみられる)、同市横倉丘陵頂一帯に点在する大小約五〇におよぶ古墳地帯など、重要な古墳群がみられるが、実際には、その殆んどが鉄道用地からはずして計画されたため、これらの遺跡は無疵の状態で保存することが出来たわけで、文化財の保護に特段の留意がはらわれている点について関係当局に対して深甚の敬意と感謝を表するものである。

しかし、横倉古墳群の一部の宇ノ崎古墳では、三基だけがどうしても破壊がさけられず、削り取られる運命にあることがはつきりしたので、昭和四〇年二月、丸森鉄道建設所・宮城県教育委員会・角田市教育委員会との話し合いがもたれ、開削前に発掘調査することに話がまとまった。調査に関する経費は、鉄道公団並びに宮城県教育委員会が一部負担し、発掘調査には宮城県教育委員会が当ることになり、文化財専門委員伊東信雄氏・大内中学校教諭志間泰治氏が調査を担当することになつた。

三、宇ノ崎古墳群について

阿武隈山脈は宮城県に入ると東と西に枝わかれするが、西の分脈にある斗蔵山塊から角田盆地に細長く掌状に突き出した丘陵で、その中でも最大の丘陵が横倉の丘陵である。この丘陵は角田市街地の北西部に、あるいは高く、あるいは低く、標高一五メートル前後の高さを保つて、沖積平地を北東にむかつてはうようにのびている。そしてこの骨格となる丘陵からさらに枝葉状に小さな丘がのびている。

古墳はこの丘陵の頂部に点々と群なしている。そしてこれらは、広大な地域におよぶことなどから、その地の字名・囲名をとつて宇ノ崎古墳・吉ノ内古墳・宮地古墳などと呼び、さらに同一地域内に多くの古墳が認められる場合には、その地名を冠して一号墳・二号墳・・・・と呼称することにした。

これらの古墳は、安永八年、仙台藩の国勢調査ともいうべき風土記御用書出、伊具郡西根横倉村の古塚の項の中に、麦壇塚、大念仏、しいな塚などの名称が記載されているが、三三年ごろ、この地にある角田小学校横倉分校で教鞭をとつていた遠藤久七氏が、これら古墳の実地踏査を試みたところ、このほかにも大小約五〇にのぼる古墳の存在することが確認され、中には宇ノ崎一号墳、宮地古墳などのように埴輪をまいてある古墳のあることなどもはつきりした。この地一帯を踏査したところ、これら古墳群の中には長軸六〇メートルにおよぶ前方後円墳(吉ノ内古墳)の含まれていることを発見した。

このように盆地にのぞむ一丘陵の上に大古墳群が認められることによつて、個々の古墳の呼称を総括して呼ぶことの必要が生じたので、旧村名を冠して横倉古墳群と総称することとした。

ところで、宇ノ崎古墳は、これら古墳群のほぼ中心部に近く、東の沖積平地にのぞむ丘陵上にみられる古墳群で、この丘陵上には八基の古墳が認められる。(第一図)

丘陵中央部近くにある古墳は、八基の中の最大なもので、かなり以前から畑地として開墾耕作されており、現在の状況からは前方後円墳か、丘陵上を利用した扁楕円形の古墳かは判然としない。もし円墳とみるならば、長径三五メートル、短径二〇メートルほどの埴輪をまいた古墳で、ここの地主は耕作中に板石で作った石棺を掘つたことがあるといつているところから考えあわせて、内部主体は箱式石棺と思われる。

この東、七〇メートルの雑木林の中には、長軸三〇メートル、高さ七メートルの帆立貝式の前方後円墳があり、さらに、その東には今回発掘の対象となつた円墳三基が、丘陵分水線上に一列に並び、さらに、この丘陵舌端には三基の円墳(うち一基は前方後円墳か)が所在する。以上述べた埴輪の繞らしてある古墳を便宜上、宇ノ崎一号墳、つぎが二号墳で、それにつづく三基をそれぞれ、西より三号・四号・五号墳と仮称することとした。

丸森線は丁度、この地点の丘陵を切断して通過するため、煙滅する前に発掘調査をすることとなつたのは前述の通りである。

四、発掘の経過

昭和四〇年三月二五日

宇ノ崎五号墳の発掘に着手、古墳の中央に、東西位に長さ九メートル、巾一メートル、地山層に達するトレンチを掘る。このほか、三号墳の外形実測を行なう。

同　　三月二六日

三号墳の発掘に着手、まず、古墳中央部に東西にトレンチを掘り、何らの遺構も認められないため、調査範囲を拡大して北半の封土を平らに剥ぎとつたが成果なく、時ならぬ吹雪に見舞われて作業も困難をきわめた。

四号墳にもトレンチを入れる。

同　　三月二八日

古墳発掘断面の実測を行なう。東西トレンチ南半の封土を平らに削り取る。内部遺構は認められなかった。

同　　三月二九日

四号・五号両墳の墳丘全都を削りとつたが、埋葬施設を発見することはできなかつた。以上で予定した古墳の発掘作業の全てを終了する。

五、宇ノ崎三号墳の発掘調査

丘陵の割と巾のある部分の分水界頂にみられる円墳で、直径一三メートル、高さ一メートル五〇センチの円墳で、これら三基の中では一番大きい古墳である。

調査にあたつては、東西に一メートル巾のトレンチを設定し、のち北半を平らに削り取り、最後に南半の調査を実施したわけであるが、墳頂下約七〇センチのところに泥岩屑が層をなして積土されており、さらにその下層には黒褐色の有機質土層がみられ、その土壌の中に、土師器の細片と木炭屑が若干認められた。この層を若干掘り下げたところからは、直径二〇センチ前後の泥岩塊が、長さ五・六〇センチ、巾二・三〇センチの範囲に出土したが、ごく限られた小範囲であつて、いずれも埋葬施設を想定しうるようなものではなく、そういつた出土状態もなしていなかつた。

これらは、むしろ古墳築造前のある時期に、ここが古代人の生活舞台となつた箇所であつたために、このような残留物が発見されたものとみたい。

なお、有機質黒褐色土層上面は一たん削平され、それに封土を盛り上げたものと考えられる。またこの下層は茶褐色土となり地山の砂質土に自然移行している。

とにかく、この古墳の調査では、丹念に、一枚一枚の紙をめくるように積土層をはいでいつたが、内部施設を思わせるような地層の変化も見られなかつたし、遺物・遺構の発見もなかった。（第二・三図）

六、宇ノ崎四号墳の発掘調査

三号墳の東、四〇メートル、丁度、丸森線の線路はこの古墳のほゞ直下の位置を通ることになる。丘陵巾のせまい場所に築造された古墳であるためか扁楕円形をなしており、長径一〇メートル、短径七メートル、高さ一メートルの小規模の円墳である。この古墳は南北にトレンチを掘り、さらにこれをもとにして調査面を拡大したが、積土の封土の部分に泥岩屑の混入が認められたのは前記の古墳と同様で、たゞ地山の泥岩層は他の古墳に比較してかなり高くなつていることが指摘できる。この古墳もまた内部埋葬施設など設けられた痕跡さえつかむことは出来なかった。（第二・三図）

七、宇ノ崎五号墳の発掘調査

四号墳のすぐ東隣約一〇メートルの場所にあり、これも四号墳同様、長径一〇メートル、短径六メートル、高さ一メートル、扁楕円形の古墳である。この古墳の調査では東西に巾一メートルのトレンチを掘つて調査したが、積土下層部に、ここでも泥岩屑の混入層がみられたが、内部埋葬遺構らしいものはなく、僅かの変化といえば、古墳中央部で泥岩屑の下層に長さ一メートル、巾五〇センチ程度の木炭屑のうすい層を発見した。これとても埋葬を想定できる証拠にはなり得ないといった感じがあつた（第二・三図）

八、考　察

この古墳群は、過去において学術的調査がなされたことがなく、盗掘された遺物を発見したという例もないた

め、今回の調査によつてこれら古墳の内部主体などをはつきりさせ、横倉古墳群の性格を明確に浮彫りにしたいものと期待をもつて実施した。しかし、結果的にみると、内部遺構など全然認めることが出来なかつたのは、かえすがえすも残念なことである。内部遺構が見られないとすると、単なる地山の瘤という疑問をもたれるむきもあるかも知れないが、周辺の土を盛り上げて積土していることや、泥岩屑を混入してつきかためていることでも人工的に築造されたものであることは歴然たるもので、すぐ近くに宇ノ崎一号墳のように埴輪のある古墳も見られることからいつても、古墳と断定して間違いない。

今回発掘した古墳は三基とも、内部遺構を認めることが出来なかつたが、古墳の発掘を実施すると、時たまこのような古墳に相遇することがある。

こういう石棺や石室の認められない古墳の場合には木棺・木炭廓・粘土廓・土壙などの発見される可能性が充分考えられるので、そういう点に細心の注意をはらつて発掘したつもりであるが、こうしたものを裏づけるものは何一つ認めがたかつた。

それでは、築造はしたが何かの都合で葬らなかつたといつた例もあるいは考える必要があるかもしれないが、かなりの労力を用いて築造されているところからみて、こういう例は少なく、むしろ何らかの形で埋葬がなされたとみるのが妥当であると考えられる。例えば死体を簡単な布、または木箱などに入れて葬つたため、それがのちに腐蝕して、ついわれわれの目にとまらないでしまうことも多いのかもしれない。

こうした埋葬方式がもしあつたと考えられるならば、現在では確認できる方法がない。将来、燐分やカルシユウム分などの簡単な化学的検出方法が研究され、それが手がるに行なえるようになつたとき、初めてこの問題が解決できるのではあるまいか、そして将来多くの類例が集められて解釈が下さるべきものと考えられる。

つぎに、ここに埋葬された人々は、どんな身分の人々であったかについて考えてみたい。この古墳からは副葬品など全然みつかっていない点からみて、ここに葬られた人は墓を造りうるような身分の者の中でも、割と低い地位にある豪族、あるいは、それらの一族のだれかの墳墓であったにちがいない。

ところで、この古墳の築造された年代はいつごろかというと、内部主体の認められない古墳のため推定の域を出ないが、古墳群の縁辺にある地域の小規模古墳であるから、この地一帯に古墳が築造され出した初期の頃の仲間には入り得ないだろう。この古墳群の中で比較的古いとみられる埴輪をもつ古墳を、東北地方の中期古墳とみるならば、この三基は、規模・内容から推して、前者より時代が下るものとみて、中期末から後期初頭頃に位置する古墳とみなすのが妥当であるまいかと考えた。

では、これら古墳を築いた人々の住居はどこにあつたものだろうか。それは、この丘陵から見下ろせる平地に生活舞台をもつていたと考えるのが当然であろう。

とするならば、この近くに住居跡があつたものと考えられる。勿論、角田市寺前、（1）同市田町裏、（2）同市枝野大坊、（3）同市住社などには、かなり大きな集落が存在したことが、最近の発掘の結果はつきりしたところから、おそらくここに住んだ人々の中の限られた人々が、住居のすぐ近くの横倉・長泉寺裏林・鱸沼などの丘陵地帯に墳墓の地を求めたものといえよう。

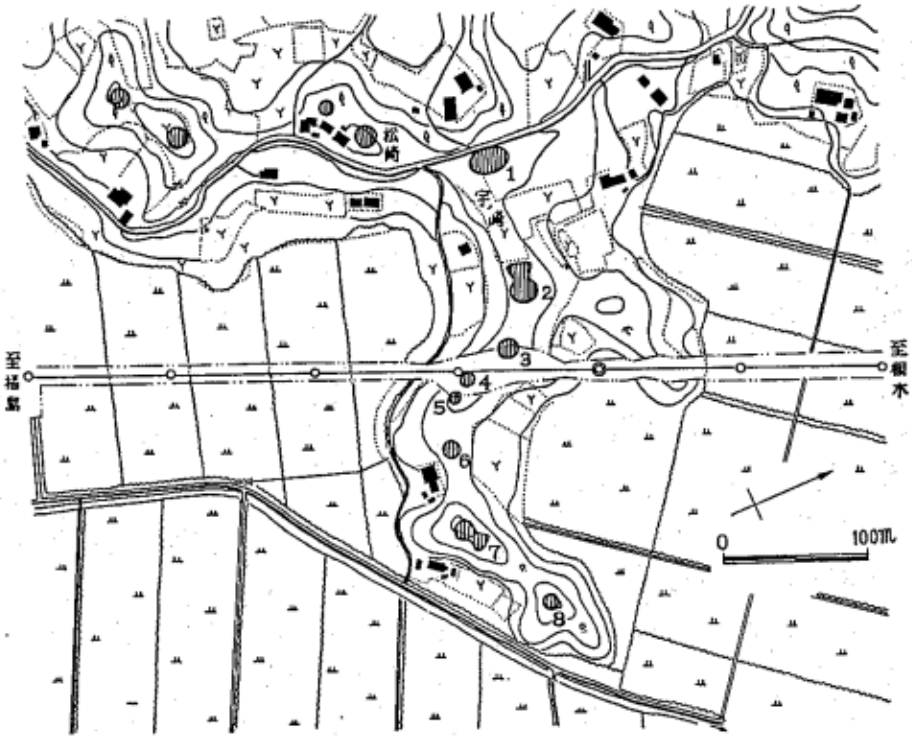
（文責　志間泰治）

（註）

（1）　志間奏治　『田町裏遺跡調査概報』　宮城県文化財調査報告書第八集

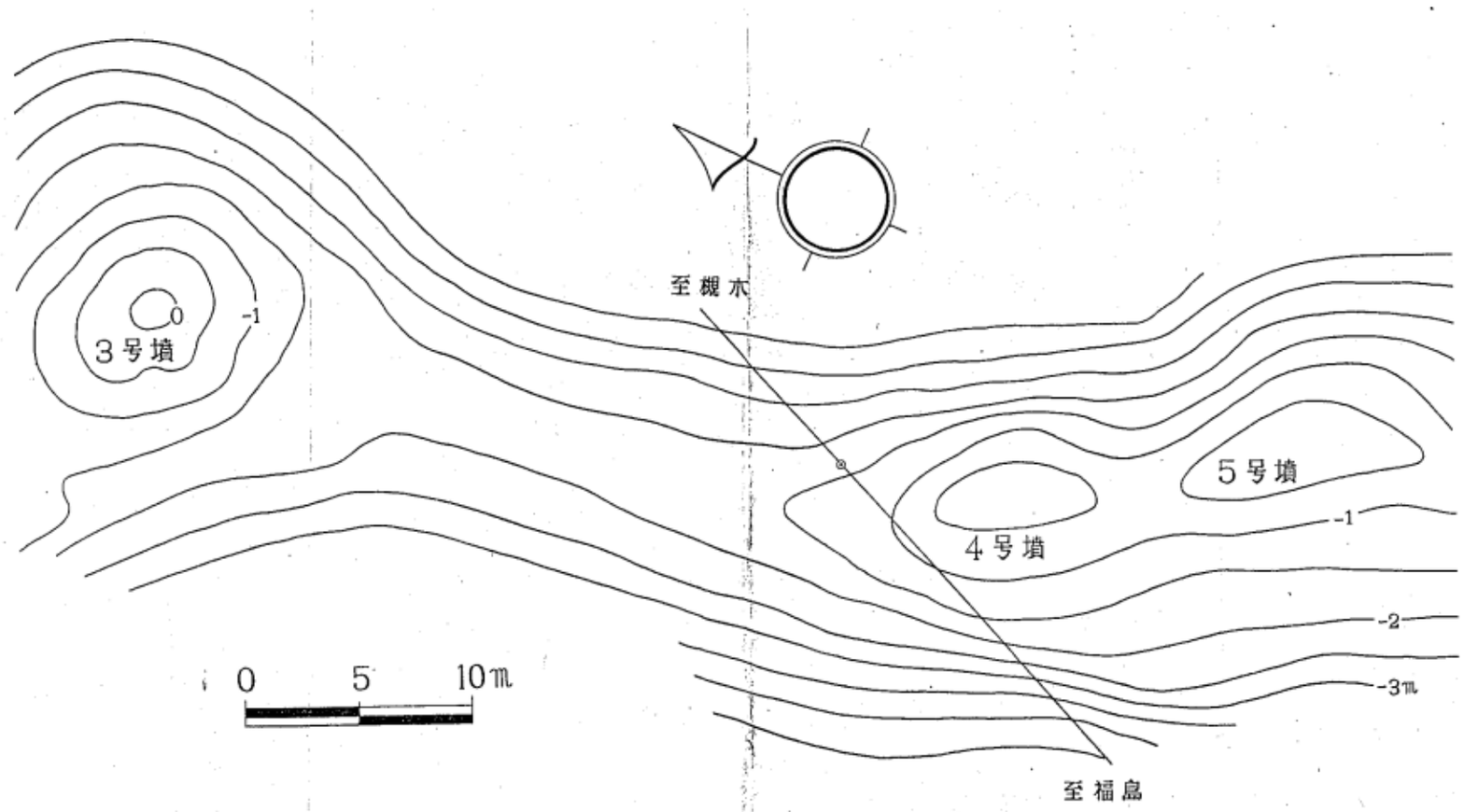
（2）　志間泰治　『大坊遺跡』　日本考古学年報１４・１５輯

（3）　志聞泰治　『宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察』　考古学雑誌四三巻四号

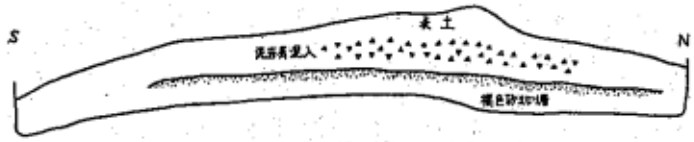


第１図　宇ノ崎古墳分布図

（地形図は日本鉄道公団盛岡工事局丸森線建設事務所提供）



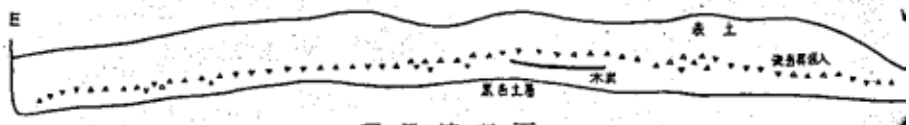
第 2 図　宇ノ崎古墳実測図



3号墳断面

3号墳断面

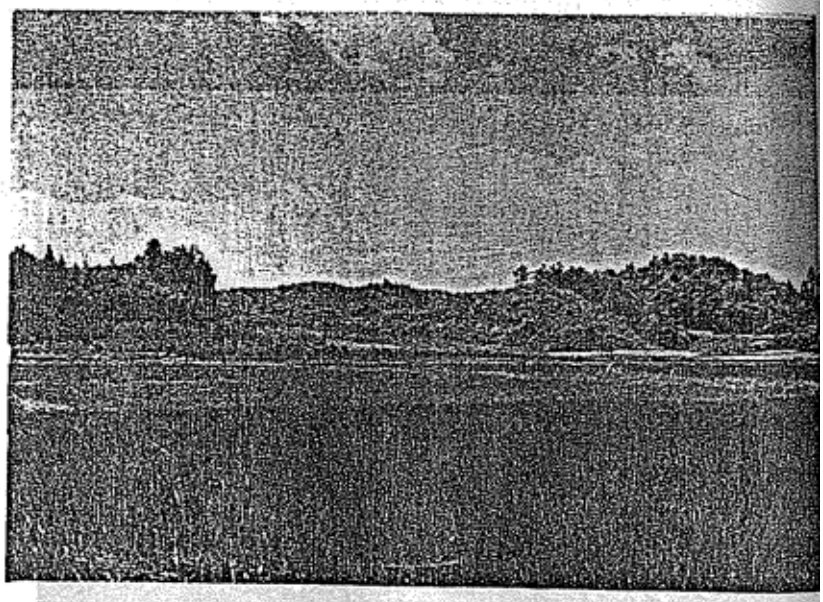
4号墳断面



5号墳断面

第3図　宇ノ崎古墳断面実測図

1. 航空写真（日本鉄道公団盛岡工事局丸森鉄道建設所提供）



2. 宇ノ崎古墳遠景（北側より望む）

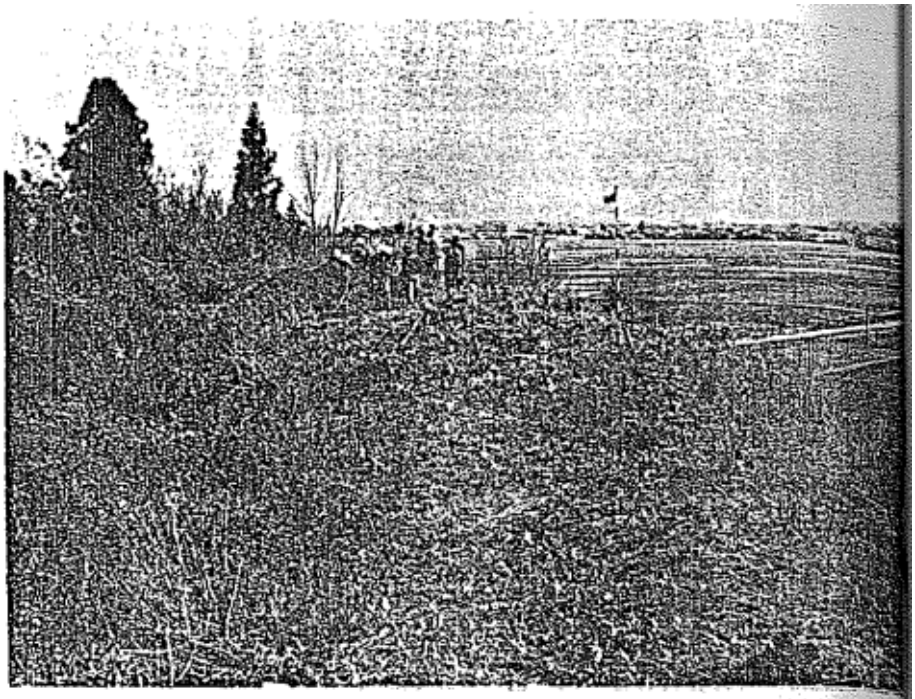
右より3号，4号，5号墳

3. 宇ノ崎3号墳

4. 宇ノ崎4号墳断面

5.　宇ノ崎5号墳

6.　宇ノ崎4号墳（右）と5号墳（左）



7. 宇ノ崎５号墳の発掘　手前が４号墳